

和歌山県持続性の高い農業生産方式導入指針
(改訂版)

平成20年3月

和歌山県農林水産部

目 次

第 1 持続性の高い農業生産方式の内容

< 普通作物 >

作-1	水稲（県北部）	-----	1
作-2	水稲（県南部）	-----	2

< 野 菜 >

野-1	きゅうり（施設）	-----	3
野-2	きゅうり（露地）	-----	4
野-3	すいか（施設）	-----	5
野-4	すいか（露地）	-----	6
野-5	メロン（施設）	-----	7
野-6	にがうり（露地）	-----	8
野-7	トマト（施設）	-----	9
野-8	トマト（露地）	-----	10
野-9	ミニトマト（施設）	-----	11
野-10	ミニトマト（露地）	-----	12
野-11	ミディトマト（施設）	-----	13
野-12	なす（施設）	-----	14
野-13	なす（露地）	-----	15
野-14	ピーマン	-----	16
野-15	シシトウ（施設）	-----	17
野-16	シシトウ（露地）	-----	18
野-17	キャベツ、ブロッコリー、はくさい	-----	19
野-18	だいこん	-----	20
野-19	かぶ	-----	21
野-20	こまつな（施設）	-----	22
野-21	こまつな（露地）	-----	23
野-22	チンゲンサイ（施設）	-----	24
野-23	みずな（施設）	-----	25
野-24	みずな（露地）	-----	26
野-25	ねぎ（施設）	-----	27
野-26	ねぎ（露地）	-----	28
野-27	たまねぎ	-----	29
野-28	レタス	-----	30
野-29	しゅんぎく（施設）	-----	31
野-30	しゅんぎく（露地）	-----	32
野-31	にんじん	-----	33
野-32	ほうれんそう（施設）	-----	34
野-33	ほうれんそう（露地）	-----	35
野-34	いちご（施設）	-----	36
野-35	しょうが	-----	37
野-36	にんにく	-----	38
野-37	えんどう（施設）	-----	39
野-38	えんどう（露地）	-----	40
野-39	いんげん	-----	41
野-40	えだまめ	-----	42
野-41	しそ（露地）	-----	43
野-42	おおば（施設）	-----	44
野-43	さつまいも	-----	45
野-44	ばれいしょ	-----	46
野-45	スイートコーン	-----	47

<花 き>		
花-1	きく（施設）	4 8
花-2	きく（露地）	4 9
花-3	カーネーション	5 0
花-4	ばら	5 1
花-5	ストック	5 2
花-6	宿根かすみそう	5 3
花-7	スターチス	5 4
花-8	ガーベラ	5 5
花-9	トルコギキョウ	5 6
花-10	スイトピー	5 7
花-11	せんりょう	5 8

<果 樹>		
果-1	温州みかん（露地）	5 9
果-2	温州みかん（施設）	6 0
果-3	はっさく	6 1
果-4	いよかん	6 2
果-5	ネーブル	6 3
果-6	甘夏	6 4
果-7	清見	6 5
果-8	不知火、はるみ	6 6
果-9	その他中晩柑 （セミノール・バレンシア・ポンカン・せとか・あまか・三宝柑・カラ・ダイダイ）	6 7
果-10	レモン（施設）	6 8
果-11	レモン（露地）	6 9
果-12	ゆず	7 0
果-13	キンカン	7 1
果-14	うめ	7 2
果-15	かき	7 3
果-16	もも	7 4
果-17	すもも	7 5
果-18	おうとう	7 6
果-19	ぶどう	7 7
果-20	ブルーベリー（露地）	7 8
果-21	なし	7 9
果-22	キウイフルーツ	8 0
果-23	びわ（施設）	8 1
果-24	びわ（露地）	8 2
果-25	いちじく	8 3
果-26	マンゴー（施設）	8 4

<工芸作物>		
工-1	茶	8 5

第2 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項

1	土壌診断の励行	8 6
2	きめ細かな施肥の実施	8 6
3	発生予察に基づく的確な防除の実施	8 6

第3 その他必要な事項

1	土壌の性質の総合的な改善	8 7
2	必要な機械、機材等及び資金の調達	8 7
3	関係補助事業の積極的な活用	8 7

第4	持続性の高い農業生産方式の定義について	8 8
----	---------------------	-----

第1 持続性の高い農業生産方式の内容

< 普通作物 >

作-1 水稲（県北部）

本地域の水田は、灰色低地土を中心に老朽化水田が多く、これらは土壌生産性が低い。高品質安定多収のため、稲わらたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、適期適正防除等の徹底により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な稲わらたい肥（窒素成分量 0.4%、C/N 比 20）の施用を基本とする。 ○稲わらをすき込む場合は、土壌中における十分な腐熟化を図るため4月以前に実施する。 	稲わらたい肥 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を田植え時に施用する。 ○有機質肥料を施用する場合は、土壌の還元化による根腐れ予防のため、含鉄資材の併用を基本とする。 	窒素成分量 8 kg/10a 以下 資材施用量 200 kg/10a
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物利用技術（アイガモ放飼） ○マルチ栽培技術（田植え時に紙マルチを敷く） ○温湯種子消毒 種子を温湯に浸漬することにより、ばか苗病、心枯線虫病、もみ枯細菌病、いもち病、苗立枯病等の種子伝染性病害を防除する。 	化学農薬使用回数 20 % 以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は、稲わらたい肥（資材現物当たり窒素成分 0.4 %、C/N 比 20）の施用を前提とした目安である。稲わらたい肥の代わりに牛ふんたい肥を用いる又は施用量を増やす場合は、施用資材からの無機態窒素供給量を勘案して、肥料の窒素施用量を減肥する。

（注2）稲わらのすき込みを行う場合、腐熟化を促進するために石灰窒素（30kg/10a）を同時施用することが望ましい。

（注3）含鉄資材は一般に有効珪酸も含有しているため、連用により稲の健全な生育が確保できる。

（注4）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

作－2 水稲（県南部）

本地域の水田は、県北部に比べ腐植含量が低い場合が多い。高品質安定多収のため、稲わらたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、適期適正防除等の徹底により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な稲わらたい肥（窒素成分量 0.4%、C/N 比 20）の施用を基本とする。 ○稲わらをすき込む場合は、土壌中における十分な腐熟化を図るため 1 月以前に実施する。 	稲わらたい肥 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を田植え時に施用する。 ○有機質肥料を施用する場合は、土壌の還元化による根腐れ予防のため、含鉄資材の併用を基本とする。 	窒素成分量 6 kg/10a 以下 資材施用量 200kg/10a
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物利用技術（アイガモ放飼） ○マルチ栽培技術（田植え時に紙マルチを敷く） ○温湯種子消毒 種子を温湯に浸漬することにより、ばか苗病、心枯線虫病、もみ枯細菌病、いもち病、苗立枯病等の種子伝染性病害を防除する。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注 1）たい肥の施用量は、稲わらたい肥（資材現物当たり窒素成分 0.4 %、C/N 比 20）の施用を前提とした目安である。稲わらたい肥の代わりに牛ふんたい肥等を用いる又は施用量を増やす場合は、施用資材からの無機態窒素供給量を勘案して、肥料の窒素施用量を減肥する必要がある。

（注 2）稲わらのすき込みを行う場合、腐熟化を促進するために石灰窒素（30kg/10a）を同時施用することが望ましい。

（注 3）含鉄資材は一般に有効珪酸も含有しているため、連用により稲の健全な生育が確保できる。

（注 4）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

< 野 菜 >

野-1 きゅうり（施設）

県内のきゅうり栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（CN比20以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 3 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 40 kg/10a 以下 窒素成分量 50 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 オンシツツヤコバチ製剤（対象害虫：オンシツコナジラミ）、コレマンアブラバチ製剤（対象害虫：アブラムシ類）、アフィデント製剤（対象害虫：アブラムシ類）、ククメリスカブリダニ製剤（対象害虫：ミナミキイロアザミウマ）など農薬登録のある天敵を所定量放飼する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 黒またはシルバーマルチをすると雑草防除効果がある。 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 つる割れ病抵抗性台木を使用する。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒、熱水消毒、蒸気消毒等により、センチュウ類など土壌病害虫の駆除効果がある。 ○光利用技術 粘着資材、非散布型農薬含有テープによりコナジラミ類、紫外線除去フィルムにより灰色かび病やアザミウマ類、コナジラミ類等の被害が軽減できる。 	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は半促成1作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－２ きゅうり（露地）

県内のきゅうり栽培ほ場は、水田転換畑である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、対抗植物利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 5 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 25 kg/10a 以下 窒素成分量 30 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 定植時にシルバーマルチなど光反射資材をマルチすると、生育初期のアブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類、ウリハムシなどの昼間活動性の害虫、および雑草防除効果が高い。黒マルチでは雑草防除効果がある。 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 つる割れ病抵抗性台木を使用する。 ○光利用技術 粘着資材を使用すると、オンシツコナジラミの被害が軽減できる。	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

（注 1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注 2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は 1 作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注 3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

（注 4）NO₃-N の流亡を抑制し、肥効を高めるためポリマルチを行うことが望ましい。

野－3 すいか（施設）

県内のすいか栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 2 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 8 kg/10a 以下 窒素成分量 10 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用性フェロモンを地域で一斉処理する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 黒またはシルバーマルチをすると雑草防除効果がある。 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 つる割れ病抵抗性台木を使用する。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒等の熱利用消毒は、つる割れ病やセンチュウ類など土壌病害虫の駆除効果がある。 ○光利用技術 粘着資材を利用して、アザミウマ類を中心に有害害虫を誘殺する。 	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作型や品種の吸収パターンを考慮して資材を選択し、施用量を決定する必要がある。窒素施用量は大玉・早出し1作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－４ すいか（露地）

県内のすいか栽培ほ場は、水田転換畑である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低く、灰色低地土や黄色土が多く、土壌生産性が低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 3 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 15kg/10a 以下 窒素成分量 18 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用性フェロモンを地域で一斉処理する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 定植時にシルバーマルチなど光反射資材をマルチすると、生育初期のアブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類、ウリハムシなどの昼間活動性の害虫、および雑草防除効果が高い。 黒マルチも雑草防除効果がある。 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 つる割れ病抵抗性台木を使用する。	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

（注 1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注 2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は 1 作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注 3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

（注 4）NO₃-N の流亡を抑制し、肥効を高めるためポリマルチを行うことが望ましい。

野-5 メロン（施設）

県内のメロン栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 2 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 10 kg/10a 以下 窒素成分量 12 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用性フェロモンを地域で一斉処理する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 黒またはシルバーマルチをすると雑草防除効果がある。 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 つる割れ病抵抗性台木を使用する。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒等の熱利用消毒は、つる割れ病やセンチュウ類など土壌病害虫の駆除効果がある。 ○光利用技術 粘着資材を利用して、コナジラミ類及びアザミウマ類を中心に有害害虫を誘殺する。 	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

（注 1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注 2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作型や品種の吸収パターンを考慮して資材を選択し、施用量を決定する必要がある。窒素施用量は 1 作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注 3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－6 igaouri (露地)

県内のigaouri栽培ほ場は、水田転換畑である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、耕種的防除の積極的な活用を図る事により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥 (C/N 比 20 以下) の施用を基本とする。	牛ふんオガクズ たい肥 2 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用もしくは少量分施とする。	窒素成分量 24 kg/10a 以下 窒素成分量 30kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○マルチ栽培技術 定植時にシルバーマルチなど光反射資材をマルチすると、生育初期のアブラムシ類、ウリノメイガ・オオタバコガなどの害虫、および雑草防除効果が高い。白黒マルチでは雑草防除効果がある。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

注 1) たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質 (N 供給能等) を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注 2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は 1 作での全施用量 (基肥 + 追肥) の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

(注 3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

(注 4) 地温の確保、NO₃-N の流亡抑制、雑草抑制、肥効の効率化を高めるためマルチングを行うことが望ましい。

野-7 トマト（施設）

県内のトマト栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 3 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 20 kg/10a 以下 窒素成分量 25 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 オンシツツヤコバチ製剤（対象害虫：オンシツコナジラミ、シルバーリーフコナジラミ）、イサエアヒメコバチ・ハモグリコマユバチ製剤（対象害虫：マメハモグリバエ）など農薬登録のある天敵を所定量放飼する。 B T 剤によるハスモンヨトウ、オオタバコガの防除を行う。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 黒またはシルバーマルチをすると雑草防除効果がある。 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 萎ちょう病、半身萎ちょう病、青枯病等土壌伝染性の病気に抵抗性のある台木を使用する。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒等の熱利用消毒は、青枯れ病、萎凋病及びネコブセンチュウなど土壌病害虫の駆除効果がある。 ○光利用技術 粘着資材等を利用して、コナジラミ類及びアザミウマ類による被害を軽減する。黄色蛍光灯の利用により、ヤガ類の被害を軽減する。 	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

（注 1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注 2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作型や品種の吸収パターンを考慮して資材を選択し、施用量を決定する必要がある。窒素施用量は半促成 1 作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注 3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－8 トマト（露地）

県内のトマト栽培ほ場は、水田転換畑である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズ たい肥 3 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 20 kg/10a 以下 窒素成分量 25 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 B T 剤によるハスモンヨトウ、オオタバコガの防除を行う。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 黒またはシルバーマルチをすると雑草防除効果がある。 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 萎ちょう病、半身萎ちょう病、青枯病等土壌伝染性の病気に抵抗性のある台木を使用する。 ○光利用技術 粘着資材等を利用して、コナジラミ類及びアザミウマ類による被害を軽減する。黄色蛍光灯の利用により、ヤガ類の被害を軽減する。	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

（注 1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注 2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は 1 作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注 3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

（注 4）NO₃-N の流亡を抑制し、肥効を高めるためポリマルチを行うことが望ましい。

野-9 ミニトマト（施設）

県内のミニトマト栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病害虫防除は、発生予察を基本に生物農薬利用等により農薬の散布回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズ たい肥 3 t/10a
	○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。	ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。	促成長期栽培 窒素成分量 50 kg/10a 以下
	○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 60 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 オンシツツヤコバチ製剤（対象害虫：オンシツコナジラミ、シルバーリーフコナジラミ）、イサエアヒメコバチ・ハモグリコマユバチ製剤（対象害虫：マメハモグリバエ）など農薬登録のある天敵を所定量放飼する。また、BT剤によるハスモンヨトウ、オオタバコガの防除、バチルスズブチリス剤による灰色かび病の防除を行う。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 黒またはシルバーマルチをすると雑草防除効果がある。 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 萎ちょう病、半身萎ちょう病、青枯病等土壌伝染性の病気に抵抗性のある台木を使用する。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒等の熱利用消毒は、青枯れ病、萎凋病及びネコブセンチュウなど土壌病害虫の駆除効果がある。 ○光利用技術 粘着資材等を利用して、コナジラミ類及びアザミウマ類による被害を軽減する。黄色蛍光灯の利用により、ヤガ類の被害を軽減する。	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作型や品種の吸収パターンを考慮して資材を選択し、施用量を決定する必要がある。窒素施用量は半促成1作での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-10 ミニトマト（露地）

県内のミニトマト栽培ほ場は、水田転換畑である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病虫害防除は発生予察を基本に、BT 剤利用等により農薬の散布回数の削減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N 比 20 以下）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズたい肥 3 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。	窒素成分量 25 kg/10a 以下
	○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 30 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 B T 剤によるハスモンヨトウ、オオタバコガの防除、バチルスズブチリス剤による灰色かび病の防除を行う。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 黒またはシルバーマルチをすると雑草防除効果がある。 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 萎ちょう病、半身萎ちょう病、青枯病等土壌伝染性の病気に抵抗性のある台木を使用する。 ○光利用技術 粘着資材等を利用して、コナジラミ類及びアザミウマ類による被害を軽減する。黄色蛍光灯の利用により、ヤガ類の被害を軽減する。 	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

(注4) NO₃-N の流亡を抑制し、肥効を高めるためポリマルチを行うことが望ましい。

野-11 ミディトマト（施設）

県内のミディトマト栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。また、病害虫防除は、発生予察を基本に生物農薬利用等により農薬の散布回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 3 t/10a
	○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。	ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。	促成長期栽培 窒素成分量 50kg/10a以下
	○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 60kg/10a以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 オンシツツヤコバチ製剤（対象害虫：オンシツコナジラミ、シルバーリーフコナジラミ）、イサエアヒメコバチ・ハモグリコマユバチ製剤（対象害虫：マメハモグリバエ）など農薬登録のある天敵を所定量放飼する。また、BT剤によるハスモンヨトウ、オオタバコガの防除、バチルスズブチリス剤による灰色かび病の防除を行う。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○被覆栽培技術 防虫ネット等被覆資材により害虫から物理的に隔離する。 ○マルチ栽培技術 黒またはシルバーマルチをすると雑草防除効果がある。 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 萎ちょう病、半身萎ちょう病、青枯病等土壌伝染性の病気に抵抗性のある台木を使用する。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒等の熱利用消毒は、青枯れ病、萎凋病及びネコブセンチュウなど土壌病害虫の駆除効果がある。 ○光利用技術 粘着資材等を利用して、コナジラミ類及びアザミウマ類による被害を軽減する。黄色蛍光灯の利用により、ヤガ類の被害を軽減する。	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

（注1） たい肥の施用量は県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2） 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作型や品種の吸収パターンを考慮して資材を選択し、施用量を決定する必要がある。窒素施用量は促成長期作での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注3） ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－１２ なす（施設）

県内のなす栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N20以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 3 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 40 kg/10a 以下 窒素成分量 50 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 ククメリスカブリダニ製剤（対象害虫：ミナミキイロアザミウマ）など農薬登録のある天敵を所定量放飼する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 黒またはシルバーマルチをすると雑草防除効果がある。 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 青枯病、半身萎ちょう病、半枯れ病等土壌病害に抵抗性のある台木を使用する。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒を行うと、センチュウ類、半身萎ちょう病など土壌病害虫の駆除効果がある。 ○光利用技術 粘着資材、非散布型農薬含有テープはコナジラミの発生密度を低下させられる。 	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

（注１）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注２）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作型や品種の吸収パターンを考慮して資材を選択し、施用量を決定する必要がある。窒素施用量は半促成1作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注３）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－１３ なす（露地）

県内のなす栽培ほ場は、水田転換畑である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低く、灰色低地土、黄色土が多く、土壌生産性が低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、対抗植物利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 5 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 40 kg/10a 以下 窒素成分量 50 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 黒またはシルバーマルチをすると雑草防除効果がある。 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 青枯病、半身萎ちょう病、半枯れ病等土壌病害に抵抗性のある台木を使用する。 ○光利用技術 粘着資材、非散布型農薬含有テープはコナジラミの発生密度を低下させられる。黄色蛍光灯の利用により、ヤガ類の被害を軽減する。	化学農薬使用回数 10%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

（注4）NO₃-Nの流亡を抑制し、肥効を高めるためポリマルチを行うことが望ましい。

野-14 ピーマン

県内のピーマン栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 3 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 30kg/10a 以下 窒素成分量 35 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術（施設） ククメリスカブリダニ製剤（対象害虫：ミナミキイロアザミウマ）など農薬登録のある天敵を所定量放飼する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 露地栽培ではシルバーマルチなど光反射資材でマルチするとアブラムシ類、コナジラミ類、アザミウマ類に有効で、雑草防除効果もある。 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 疫病に抵抗性のある品種や台木を利用する。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱、熱水、蒸気等を利用した土壌消毒は、疫病、青枯病などの土壌病害虫の駆除効果がある。 ○光利用技術 シルバーフィルム等の反射資材を利用するとアブラムシ類の飛来が軽減される。黄色灯等の利用によりオオタバコガなどヤガ類の被害を抑制する。 	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作型や品種の吸収パターンを考慮して資材を選択し、施用量を決定する必要がある。窒素施用量は半促成1作での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-15 シシトウ（施設）

県内のシシトウ栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。また、病害虫防除は発生予察を基本に、生物農薬利用等により農薬の散布回数の削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 3 t/10a
	○塩類集積ほ場では、ピートモスまたは稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。	ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
	○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。	
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。	窒素成分量 促成 40kg/10a 半促成 30kg/10a 以下
	○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 促成 50kg/10a 半促成 35kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ククメリスカブリダニ製剤（対象害虫：アザミウマ類）など天敵農薬を所定量散布（放飼）する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○被覆栽培技術 ヨトウムシ類、タバコガ類、アブラムシ類の被害を軽減するため、施設開口部を寒冷紗または防虫ネットで遮蔽する。 ○マルチ栽培技術 黒マルチは雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱、熱水、蒸気等を利用した土壌消毒は疫病、センチュウ類等の土壌病害虫の駆除効果がある。 ○光利用技術 粘着資材、非散布型農薬含有テープを使用すると、アザミウマ類の発生密度を低下させられる。紫外線除去フィルムは灰色かび病やミナミキイロアザミウマなどの発生密度を低下させられる。	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合は、作型や品種の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は促成または半促成栽培での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-16 シシトウ（露地）

県内のシシトウ栽培ほ場は、水田転換畑である場合が多く、塩基含量や腐食含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病虫害防除は発生予察を基本に、生物農薬利用等により農薬の散布回数の削減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズ たい肥 3 t/10a
	○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。	
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。	窒素成分量 25 kg/10a 以下
	○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 30 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 定植時にシルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをすると、アブラムシ類の被害を軽減でき雑草防除効果もある。 ○光利用技術 粘着資材を使用すると、アザミウマ類の発生密度を低下させられる。紫外線除去フィルムは灰色かび病やミナミキイロアザミウマなどの発生密度を低下させられる。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-17 キャベツ、ブロッコリー、はくさい

県内のキャベツ、ブロッコリー、はくさい栽培ほ場は、水田裏作である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 5 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 35 kg/10a 以下 窒素成分量 40 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 B T剤によるコナガ、アオムシなどの防除 ○フェロモン剤利用技術 コナガの交信攪乱用性フェロモンを地域で一斉処理する。 ○対抗植物利用技術 前作に根こぶ病用おとりダイコンを植える。 ○マルチ栽培技術 マルチ栽培による雑草防除 ○抵抗性品種栽培・台木利用技術 ハクサイにおいては、根こぶ病抵抗性品種を使用する。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒を行うと、センチュウ類、立枯病など土壌病害虫の駆除効果がある。	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は秋冬作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

(注4) NO₃-Nの流亡を抑制し、肥効を高めるためポリマルチを行うことが望ましい。

野－18 だいこん

県内のだいこん栽培ほ場の多くは砂丘未熟土で、腐植含量や粘土含量が低く塩基置換容量が小さい場合が多い。高品質安定多収のため、ピートモス等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機物施用技術 土壌診断に基づいた適切なピートモス又は綿粉の施用を基本とする。	ピートモス 1 t/10a 綿粉 1 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 20 kg/10a 以下 窒素成分量 25 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 B T 剤によるコナガ、アオムシなどの防除 ○フェロモン剤利用技術 コナガの交信攪乱用性フェロモンを地域で一斉処理する。 ○被覆栽培技術 寒冷紗や防虫ネットで畝上を被覆し、アブラムシ類や鱗翅目害虫の飛来を防止する。 ○マルチ栽培技術 マルチ栽培による雑草防除 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱を利用した土壌消毒は立枯病、センチュウ類等の土壌病害虫の駆除効果がある。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) 未熟たい肥やふん尿入りたい肥の多量施用、木片の大きなパークたい肥等の施用により岐根の発生を助長するため、これらたい肥の施用は控える。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量(基肥+追肥)の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-19 かぶ

県内のかぶ栽培ほ場の多くは水田転換畑で、腐植含量や粘土含量が低く塩基置換容量が小さい場合が多い。高品質安定多収のため、ピートモス等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機物施用技術 土壤診断に基づいた適切なピートモス又は稲ワラの施用を基本とする。	ピートモス 1 t/10a 稲ワラ 600kg/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 16 kg/10a 以下 窒素成分量 20 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 B T 剤によるコナガ、アオムシなどの防除 ○フェロモン剤利用技術 コナガの交信攪乱用性フェロモンを地域で一斉処理する。 ○被覆栽培技術 寒冷紗や防虫ネットで畝上を被覆し、アブラムシ類や鱗翅目害虫の飛来を防止する。 ○抵抗性品種栽培技術 萎黄病抵抗性品種を利用する ○熱利用土壤消毒技術 太陽熱消毒により土壤に熱を加え、センチュウ類の密度を低減する	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) 未熟たい肥やふん尿入りたい肥の多量施用、木片の大きなバークたい肥等の施用により岐根の発生を助長するため、これらたい肥の施用は控える。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量(基肥+追肥)の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壤診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壤で覆うことが望ましい。

野－２０ こまつな（施設）

県内のこまつな栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病害虫防除は性フェロモン剤や被覆栽培技術の利用等により農薬散布の回数削減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 3 t/10a
	○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。	ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。	窒素成分量 8 kg/10a 以下
	○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 10kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 B T剤によるコナガの防除を行う。 ○性フェロモン剤利用技術 コナガの交信攪乱用性フェロモン剤を処理する。 ○被覆栽培技術 寒冷紗または防虫ネットで開口部を遮蔽するとコナガ等の鱗翅目害虫、アブラムシ類、ハモグリバエ類の被害が軽減できる。 施設では、同資材で開口部を遮蔽する。 ○マルチ栽培技術 黒マルチすると雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱、熱水、蒸気等を利用した土壌消毒は苗立枯病センチュウ類等の土壌病害虫の駆除効果がある。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これ以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は、1作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-21 こまつな（露地）

県内のこまつな栽培ほ場は、水田裏作である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病害虫防除は BT 剤や被覆栽培技術の利用等により農薬散布の回数削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N 比 20 以下）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 5 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。	窒素成分量 20kg/10a 以下
	○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 25 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 BT 剤によるコナガの防除を行う。 ○性フェロモン剤利用技術 コナガの交信攪乱用フェロモン剤を処理する。 ○被覆栽培技術 寒冷紗または防虫ネットで畝上をべたがけまたはトンネル被覆すると、アブラムシ類、ハモグリバエ類、コナガ等の鱗翅目害虫の被害が軽減できる。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをすると、アブラムシ類、アザミウマ類の被害が軽減でき、雑草防除効果もある。 黒マルチは雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱、熱水、蒸気等を利用した土壌消毒は苗立枯病センチュウ類等の土壌病害虫の駆除効果がある。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注 1）たい肥の施用量は県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。

これ以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注 2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は、秋冬作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

（注 3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-22 チンゲンサイ（施設）

県内のチンゲンサイ栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、対抗植物利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 3 t/10a × 2回/年 ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 8 kg/10a 以下 窒素成分量 10 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 B T剤によるコナガ、アオムシなどの防除 ○フェロモン剤利用技術 コナガの交信攪乱用性フェロモン剤を処理する。 ○被覆栽培技術 寒冷紗や防虫ネットでハウス開口部をを被覆し、アブラムシ類や鱗翅目害虫の飛来を防止する。 ○マルチ栽培技術 マルチ栽培による雑草防除 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒、熱水消毒、蒸気消毒などにより苗立枯病、根こぶ病の駆除効果がある。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした、5～6作/年の周年栽培における年間の目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-23 みずな（施設）

県内のみずな栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病害虫防除は生物農薬や被覆栽培技術の利用等により農薬散布回数の削減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 1 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 10kg/10a 以下 窒素成分量 12kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 ヨトウムシ等の防除に BT 剤を使用する。 ○性フェロモン剤利用技術 交信かく乱フェロモン剤を処理する。 ○被覆栽培技術 アブラムシ類、鱗翅目害虫等の被害を軽減するため、施設開口部を寒冷紗または防虫ネットで遮蔽する。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒等の熱処理により土壌消毒を行う。 ○機械除草技術 管理機等による中耕除草を行う。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注 1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の年間の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注 2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は 1 作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

（注 3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－２４ みずな（露地）

県内のみずな栽培ほ場は、水田裏作である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病害虫防除は生物農薬や被覆栽培技術の利用等により農薬散布回数の削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズたい肥 3 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 19kg/10a 以下 窒素成分量 24 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 ヨトウムシ等の防除に BT 剤を使用する。 ○性フェロモン剤利用技術 交信かく乱フェロモン剤を処理する。 ○被覆栽培技術 アブラムシ類、鱗翅目害虫等の被害を軽減するため、寒冷紗等でベタがけまたはトンネル被覆する。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒等の熱処理により土壌消毒を行う。 ○機械除草技術 管理機等による中耕除草を行う。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注 1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注 2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は秋冬作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

（注 3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－２５ ねぎ（施設）

県内のねぎ栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 2 t/10a × 3 回／年 ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 12 kg/10a 以下 窒素成分量 15 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 コナガの交信攪乱用性フェロモン剤を処理する。 ○被覆栽培技術 寒冷紗や防虫ネットで施設開口部を被覆し、ネギコガやハモグリバエ、鱗翅目害虫の飛来を防止する。 ○マルチ栽培技術 マルチ栽培による雑草防除 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒を行うと、苗立枯病、センチュウ類等の土壌病害虫の駆除効果がある。 ○光利用技術 粘着資材を使用すると、アザミウマ類の発生密度を低下させられる。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注 1）たい肥の施用量は、3 作／年の周年栽培における、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注 2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は 1 作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

（注 3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－２６ ねぎ（露地）

県内のねぎ栽培園は、灰色低地土、黄色土が多く、土壌生産性が低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物を投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 5 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 16kg/10a 以下 窒素成分量 20 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○フェロモン剤利用技術 コナガの交信攪乱用性フェロモン剤を処理する。 ○被覆栽培技術 寒冷紗や防虫ネットで畝上を被覆し、ネギコガやハモグリバエ、鱗翅目害虫の飛来を防止する。 ○マルチ栽培技術 マルチ栽培による雑草防除 ○光利用技術 粘着資材を使用すると、アザミウマ類の発生密度を低下される。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の年間施用量を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－２７ たまねぎ

県内のたまねぎ栽培ほ場は、水田裏作である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、マルチ栽培技術による雑草防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 3 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 16 kg/10a 以下 窒素成分量 20 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○マルチ栽培技術 マルチ栽培による雑草防除 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒を行うと、苗立枯病、センチュウ類等の土壌病害虫の駆除効果がある。	化学農薬使用回数 10%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

(注4) NO₃-Nの流亡を抑制し、肥効を高めるためポリマルチを行うことが望ましい。また、マルチ栽培において栽植密度を高める場合は密度に合わせて施肥量を増やす必要がある。

野－２８ レタス

県内のレタス栽培ほ場は、水田裏作である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、被覆栽培技術による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）又は鶏ふんオガクズ堆肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズ たい肥 3 t/10a 鶏ふんオガクズ たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 20kg/10a 以下 窒素成分量 25 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○被覆栽培技術 寒冷紗や防虫ネットで畝上を被覆し、アブラムシ類、鱗翅目害虫の飛来を防止する。 ○マルチ栽培技術 マルチ栽培による雑草防除 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒などによりビッグベイン病等を防除する。 ○光利用技術 シルバーフィルム等の反射資材を利用するとアブラムシ類の飛来が軽減される。黄色灯の利用によりオオタバコガなどヤガ類の被害を抑制する。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注 1）たい肥の施用量は、県内産たい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注 2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は秋冬作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

（注 3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

（注 4）NO₃-N の流亡を抑制し、肥効を高めるためポチマルチを行うことが望ましい。

野-29 しゅんぎく（施設）

県内のしゅんぎく栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病害虫防除は、生物農薬や被覆栽培技術の利用等により農薬の散布回数の削減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 1 t/10a
	○塩類集積ほ場では、ピートモスまたは稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。	ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
	○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。	
化学肥料低減技術	○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。	窒素成分量 12 kg/10a 以下
	○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 15 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 B T剤によるハスモンヨトウの防除を行う。 ○性フェロモン剤利用技術 ハスモンヨウの交信かく乱用フェロモン剤を処理する。 ○被覆栽培技術 ヨトウムシ類、アブラムシ類、ハモグリバエ類の被害を軽減するため、施設開口部を寒冷紗または防虫ネットで遮蔽する。 ○機械除草技術 雑草については管理機等による除草を行う。 ○熟利用土壌消毒技術 良質の堆肥を施用し、作付け前に太陽熱消毒を行い、ハモグリバエのさなぎ、萎凋病等の土壌病害虫防除と雑草予防を行う。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作型や品種の吸収パターンを考慮して資材を選択し、施用量を決定する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－３０ しゅんぎく（露地）

県内のしゅんぎく栽培ほ場は、水田転換畑や砂丘未熟土である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病虫害防除は、生物農薬や被覆栽培技術の利用等により農薬の散布回数の削減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 3 t/10a
	○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。	
化学肥料低減技術	○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。	窒素成分量 20 kg/10a 以下
	○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 25 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 B T剤によるハスモンヨトウの防除を行う。 ○性フェロモン剤利用技術 ハスモンヨトウの交信かく乱用フェロモン剤を処理する。 ○被覆栽培技術 寒冷紗または防虫ネットでベタがけまたはトンネル被覆する。 ○機械除草技術 雑草については管理機等による除草を行う。 ○熱利用土壌消毒技術 良質の堆肥を施用し、作付け前に太陽熱消毒を行い、ハモグリバエのさなぎ、萎凋病等の土壌病虫害防除と雑草予防を行う。 ○光利用技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチすることにより、アブラムシ類の被害軽減と雑草予防を行う。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。

これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は、秋冬作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－３１ にんじん

県内のにんじん栽培ほ場の多くは砂丘未熟土で、腐植含量や粘土含量が低く塩基置換容量が小さい場合が多い。高品質安定多収のため、ピートモス、綿粉等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、被覆栽培技術による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切なピートモス又は綿粉の施用を基本とする。	ピートモス 1 t/10a 綿粉 1t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 20 kg/10a 以下 窒素成分量 25 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○被覆栽培技術 寒冷沙や防虫ネットで畝上を被覆し、アブラムシ類や鱗翅目害虫の飛来を防止する。 ○マルチ栽培技術 マルチ栽培による雑草防除 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒、熱水消毒、蒸気消毒などにより苗立枯病、根こぶ病の駆除効果がある。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) 未熟たい肥やふん尿入りたい肥の多量施用、木片の大きなパークたい肥等の施用により岐根の発生を助長するため、これらたい肥の施用は控える。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量(基肥+追肥)の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-32 ほうれんそう（施設）

県内のほうれんそう栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、被覆栽培技術による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズたい肥 3 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 8kg/10a 以下 窒素成分量 10kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 寒冷紗や防虫ネットで施設開口部を被覆し、アブラムシ類、アザミウマ類、鱗翅目害虫の飛来を防止する。 ○マルチ栽培技術 マルチ栽培による雑草防除 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒を行うと、立枯病、萎凋病、センチュウ類等の土壌病害虫の駆除効果がある。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の年間の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－３３ ほうれんそう（露地）

県内のほうれんそう栽培ほ場は、水田裏作である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、被覆栽培技術による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズたい肥 5 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 16kg/10a 以下 窒素成分量 20 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 寒冷紗や防虫ネットで畝上を被覆し、アブラムシ類、アザミウマ類、鱗翅目害虫の飛来を防止する。 ○マルチ栽培技術 マルチ栽培による雑草防除 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒を行うと、立枯病、萎凋病、センチュウ類等の土壌病害虫の駆除効果がある。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は秋冬作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－34 いちご（施設）

県内のいちご栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物を投入により地力を高めることが大切である。

また、高度な発生予察、生物農薬利用技術による防除の徹底等により農薬散布の回数全体の削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 2 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 16kg/10a 以下 窒素成分量 20 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 コレマンアブラバチ製剤（対象害虫：アブラムシ類）、ククメリスカブリダニ製剤（対象害虫：ミカンキイロアザミウマ）、チリカブリダニ製剤（対象害虫：ハダニ類）など農薬登録のある天敵を所定量放飼する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○被覆栽培技術 寒冷紗、防虫ネットで施設開口部を被覆し、ミカンキイロアザミウマ、アブラムシ類、鱗翅目害虫の飛来を防止する。 ○マルチ栽培技術 黒マルチをすると雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒を行うと、萎黄病、センチュウ類等の土壌病虫害の駆除効果がある。 	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は促成栽培での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-35 しょうが

県内のしょうが栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、綿実粕等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な綿実粕の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	綿実粕 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 55 kg/10a 以下 窒素成分量 70 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 ハスモンヨトウの大量誘殺用フェロモン剤を設置する。 ○被覆栽培技術 寒冷紗、防虫ネットで施設開口部を被覆し、鱗翅目害虫の飛来を防止する。 ○マルチ栽培技術 黒マルチをすると雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱、熱水、蒸気等を利用した土壌消毒は根茎腐敗病等の土壌病害虫の駆除効果がある。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、砂丘未熟土への綿実粕の施用を前提とした目安である。これ以外の品質（N供給能等）を有する資材（稲わら、シュガートップ）を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターン（作型による変化も含め）を考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は砂丘未熟土地帯での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－36 にんにく

県内のにんにく栽培圃場は、水田転作畑や水田裏作栽培である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のためには、牛糞オガクズ堆肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病害虫・雑草防除は、耕種的、物理的防除の積極的な導入により農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<p>○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。</p> <p>○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。</p>	牛ふんオガクズ たい肥 2t/10a
化学肥料低減技術	<p>○肥効調整型肥料施用技術 基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調整型肥料の施用を基本とする。</p>	窒素成分量 32kg/10a 以下
	<p>○有機質肥料施用技術 有機質肥料を使用する場合は基肥では全面施用、追肥では局所施用とする。</p>	窒素成分量 41kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<p>○生物農薬利用技術 B T剤によるネギコガの防除を行う。</p> <p>○被覆栽培技術 防虫ネット等でトンネル被覆すると、アブラムシ類、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。</p> <p>○マルチ栽培技術 ポリフィルムを被覆し、雑草の繁茂を抑制することにより、除草剤使用の軽減ができる。</p> <p>○熱利用土壌消毒技術 太陽熱、熱水、蒸気等を利用した土壌消毒はイモグサレセンチュウ類等の土壌病害虫の駆除効果及び除草効果がある。</p>	化学農薬使用回数 30%以上削減
その他の留意事項	<p>○耕種的防除技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連作は避け、他の作物との輪作を行う。 ・地下水位の高い圃場では、高畦栽培を行う。 ・病害虫被害茎葉および残渣は圃場周辺に放置せず、適正に処分する。 	

(注1) たい肥の施用量は県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これ以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調整型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は、1作での全施用量（元肥＋追肥）の上限の目安である。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合は、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-37 えんどう（施設）

県内のえんどう栽培ほ場では塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 2 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 18 kg/10a 以下 窒素成分量 23 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用フェロモン剤、ハスモンヨトウの大量誘殺用フェロモン剤を設置する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○被覆栽培技術 播種後、寒冷紗または防虫ネットで畝上を被覆すると、鳥害、アブラムシ類（ウイルス病）、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。また、施設の開口部を寒冷紗または防虫ネットで被覆しても同様な効果がある。施設の外張り用被覆資材に紫外線除去フィルムを使用すると、灰色かび病、ナモグリバエの被害が軽減できる。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをするとウラナミシジミ、アブラムシ類、アザミウマ類の被害が軽減でき、雑草防除効果もある。 黒マルチは雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒等の熱利用消毒は、立枯病、茎えそ病及びコガネムシ類の幼虫等の土壌病害虫に対して効果がある。 ○光利用技術 粘着資材による誘殺、紫外線カットフィルムを利用して、ハモグリバエ類及び、黄色蛍光灯等を利用して、ヤガ類による被害を軽減する。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これ以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターン（作型・品種による変化も含め）を考慮して資材を選択し、施用量を決定する必要がある。窒素施用量は、うすいえんどうでの全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-38 えんどう（露地）

県内のえんどう栽培ほ場は、水田裏作である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○太陽熱処理を行う場合は処理時に稲わら等を施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 3 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 12 kg/10a 以下 窒素成分量 15 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用フェロモン剤、ハスモンヨトウの大量誘殺用フェロモン剤を設置する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○被覆栽培技術 播種後、寒冷紗または防虫ネットで畝上を被覆すると、鳥害、アブラムシ類（ウィルス病）、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをするとウラナミシジミ、アブラムシ類、アザミウマ類の被害が軽減でき、雑草防除効果もある。 黒マルチは雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒等の熱利用消毒は、立枯病、茎えそ病及びコガネムシ類の幼虫等の土壌病害虫に対して効果がある。 ○光利用技術 粘着資材による誘殺で、ハモグリバエ類による被害を軽減する。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これ以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターン（作型・品種による変化も含め）を考慮して資材を選択し、施用量を決定する必要がある。窒素施用量は、うすいえんどうでの全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-39 いんげん

県内のいんげん栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 3 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 16 kg/10a 以下 窒素成分量 20 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用フェロモン剤、ハスモンヨトウの大量誘殺用フェロモン剤を設置する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○被覆栽培技術 播種後、寒冷紗または防虫ネットで畝上を被覆すると、鳥害、アブラムシ類（ウィルス病）、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをすると、アブラムシ類、アザミウマ類の被害が軽減でき、雑草防除効果もある。 黒マルチは雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒等の熱利用消毒は、根腐病等の土壌病害に対して効果がある。 ○光利用技術 粘着資材による誘殺で、ハモグリバエ類による被害を軽減する。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これ以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターン（作型・品種による変化も含め）を考慮して資材を選択し、施用量を決定する必要がある。窒素施用量は、いんげんでの全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-40 えだまめ

県内のえだまめ栽培ほ場は、砂丘未熟土、水田転換畑である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病害虫防除はシルバーポリフィルムのマルチング等物理的手法を主体に農薬の使用は、開花期～子実肥大期にとどめることにより散布回数の削減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 1 t/10a
	○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。	
化学肥料低減技術	○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。	窒素成分量 8 kg/10a 以下
	○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 10 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○被覆栽培技術 寒冷紗または防虫ネットで畝上をトンネル被覆すると、アブラムシ類や鱗翅目害虫の被害が軽減できる。施設では、同資材で開口部を遮蔽する。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムでマルチ栽培するとアブラムシ類、アザミウマ類の飛来防止効果および雑草防除効果がある。 黒マルチ栽培で雑草防除効果がある。 ○性フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用性フェロモン剤を処理する。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした、5～6作/年の周年栽培における年間の目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-41 しそ（露地）

県内のしそ栽培ほ場は、水田転換畑である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病虫害防除は発生予察を基本に、生物農薬利用等により農薬の散布回数の削減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 3 t/10a
	○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。	
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。	窒素成分量 35kg/10a 以下
	○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 44kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 B T剤によるハスモンヨトウの防除を行う。 ○性フェロモン剤利用技術 ハスモンヨトウの交信かく乱用フェロモン剤を処理する。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをすると、アブラムシ類の被害を軽減でき雑草防除効果もある。 黒マルチは雑草防除効果がある。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野－４２ おおば（施設）

施設栽培では塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用等による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切なバークたい肥（C/N 比 2.5 以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	バークたい肥 1 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 24 kg/10a 以下 窒素成分量 30 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 ハスモンヨトウの交信攪乱用性フェロモン剤を処理する。 ○被覆栽培技術 寒冷紗や防虫ネットで施設開口部を被覆し、ダニ類・アブラムシ類の侵入、鱗翅目害虫の飛来を防止する。 ○マルチ栽培技術 マルチ栽培による雑草防除 ○光利用技術 黄色・青色粘着資材、黄色灯などを利用して、害虫の密度を低減する ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱や熱水、蒸気等により土壌に熱を加え、センチュウ類や土壌病原菌の密度を低減する ○生物農薬利用技術 BT剤によるハスモンヨトウなどの鱗翅目害虫の防除に使用する 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注 1）たい肥の施用量はバークたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注 2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は 1 作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

（注 3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-43 さつまいも

県内のさつまいも栽培ほ場の多くは砂丘未熟土で、腐植含量や粘土含量が低く、塩基置換容量が小さい場合が多い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 2 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 6kg/10a 以下 窒素成分量 8 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○フェロモン剤利用技術 ハスモンヨトウの大量誘殺用性フェロモン剤を処理する。 ○マルチ栽培技術 マルチ栽培による雑草防除	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、県内産たい肥の施用を前提とした目安である。鶏ふんオガクズたい肥等窒素含量の高い堆肥の多量施用では蔓ぼけや、皮色、食味の低下を招くため、牛ふんオガクズ堆肥の施用を基本とした。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

(注4) NO₃-N の流亡を抑制し、肥効を高めるためポチマルチを行うことが望ましい。

野-44 ばれいしょ

県内のばれいしょ栽培は、多毛作水田や中山間の畑ほ場である場合が多く、塩基含量や腐食含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病害虫防除は、生物農薬や対抗植物利用技術の利用等により農薬の散布回数の削減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 2 t/10a
	○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。	
化学肥料低減技術	○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。	窒素成分量 12 kg/10a 以下
	○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 15 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 非病原性エルビニア・カロトボーラ剤による軟腐病の防除を行う。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○マルチ栽培技術 黒マルチは雑草防除効果がある。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作型や品種の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

野-45 スイートコーン

県内のスイートコーン栽培ほ場は、水田転換畑である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、病害虫防除は BT 剤やシルバーポリマルチ利用等により農薬散布の回数削減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N 比 20 以下）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 5 t/10a
化学肥料低減技術	○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。	窒素成分量 20 kg/10a 以下
	○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 25 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 BT 剤によるオオタバコガの防除を行う。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをすると、アブラムシ類の被害が軽減でき、雑草防除効果もある。 黒マルチは雑草防除効果がある。 ○光利用技術 黄色灯の利用によりアワノメイガ、ヤガ類などの被害を軽減する。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注 1) たい肥の施用量は県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これ以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注 2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は、全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

(注 3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

(注 4) NO₃-N の流亡を抑制し、肥効を高めるためポリマルチを行うことが望ましい。

<花 き>

花-1 きく（施設）

県内のきく栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 2 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を基肥として施用する。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 20 kg/10a 以下 窒素成分量 25 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用フェロモン剤、ハスモンヨトウの大量誘殺用フェロモン剤を設置する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○被覆栽培技術 施設開口部を寒冷紗または防虫ネットで被覆すると、アブラムシ類、アザミウマ類、マメハモグリバエ、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。 ○マルチ栽培利用技術 黒マルチをすると雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒、熱水消毒、蒸気消毒などにより、青枯病、立枯病、ネグサレセンチュウ等の土壌伝染性病害を防除する。 ○光利用技術 シルバーフィルム等の反射資材を利用するとアブラムシ類の飛来が軽減される。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（無機態窒素供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

花－２ きく（露地）

県内のきく栽培ほ場は、水田転換畑である場合が多く、塩基含量や腐植含量が一般的に低い。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズたい肥 3 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を基肥として施用する。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 25 kg/10a 以下 窒素成分量 30 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用フェロモン剤、ハスモンヨトウの大量誘殺用フェロモン剤を設置する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○被覆栽培技術 定植後、寒冷紗または防虫ネットで畝上を被覆すると、アブラムシ類（ウィルス病）、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをすると、アブラムシ類、アザミウマ類の被害が軽減でき、雑草防除効果もある。 黒マルチは雑草防除効果がある。 ○光利用技術 シルバーフィルム等の反射資材を利用するとアブラムシ類の飛来が軽減される。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注 1）たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。他のたい肥を施用する場合は、たい肥の品質（無機態窒素供給能等）に基づき施用量を補正する必要がある。

（注 2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は 1 作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注 3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

花-3 カーネーション

県内のカーネーション栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 	牛ふんオガクズたい肥 3 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を基肥として施用する。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 60kg/10a 以下 窒素成分量 65 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用フェロモン剤、ハスモンヨトウの大量誘殺用フェロモン剤を設置する。 ○被覆栽培技術 施設開口部を寒冷紗または防虫ネットで被覆すると、アブラムシ類、アザミウマ類、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをすると、アブラムシ類、アザミウマ類の被害が軽減でき、雑草防除効果もある。黒マルチは雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒、熱水消毒、蒸気消毒などにより、萎凋細菌病等の土壌伝染性病害を防除する。 ○光利用技術 粘着資材を利用して、アザミウマ類による被害を軽減する。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は周年栽培での年間施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

花-4 ばら

県内のばら栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、パークたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 定植前又は改植時の土壌診断に基づいた適切なパークたい肥（C/N比25以下）の施用を基本とする。	パークたい肥 5 t/10a
化学肥料低減技術	○局所施用及び追肥体系とする。 ○有機質肥料を施用する場合は、成木の場合においても1回の施用量を窒素成分で10kg/10a以下とする。	窒素成分量 60kg/10a以下 窒素成分量 60kg/10a以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 BT剤による鱗翅目害虫の防除 ○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用フェロモン剤、ハスモンヨトウの大量誘殺用フェロモン剤を設置する。 ○対抗植物利用技術 定植前にマリーゴールドなどセンチュウ対抗植物を植栽する。 ○被覆栽培技術 施設開口部を寒冷紗または防虫ネットで被覆すると、アブラムシ類、アザミウマ類、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。 また、紫外線除去フィルムを外張り被覆するとアザミウマ類、アブラムシ類の被害が軽減できる。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをすると、アブラムシ類、アザミウマ類の被害が軽減でき、雑草防除効果もある。 黒マルチは雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒、熱水消毒、蒸気消毒などにより、立枯病、根頭がんしゅ病等の土壌伝染性病害を防除する。 ○光利用技術 粘着資材を利用して、アザミウマ類などによる被害を軽減する。シルバーフィルム等の反射資材を利用するとアブラムシ類の飛来が軽減される。黄色灯の利用によりオオタバコガなどヤガ類の被害を抑制する。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、パークたい肥の施用を前提とした目安である。他のたい肥を施用する場合及び透水性改善のため下層の改善を行う場合は、たい肥の品質（無機態窒素供給能等）及び土層の深さに基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 窒素施用量は周年切り成木園における年間の全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。幼木では樹齢を考慮して施用量を決定する。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

(注4) 紫外線除去フィルム利用は、品種によっては花の色に影響がでる場合があるので注意する。

花-5 ストック

県内のストック栽培ほ場では塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 3 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を基肥として施用する。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 20kg/10a 以下 窒素成分量 25 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 B T 剤による鱗翅目害虫の防除 ○フェロモン剤利用技術 コナガの交信攪乱用フェロモン剤を設置する。 ○被覆栽培技術 施設開口部を寒冷紗または防虫ネットで被覆すると、アブラムシ類、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをすると、アブラムシ類などの被害が軽減でき、雑草防除効果もある。 黒マルチは雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒、熱水消毒、蒸気消毒などにより、立枯病、センチュウ類等の土壌伝染性病害を防除する。 ○光利用技術 粘着資材を利用して、アザミウマ類などによる被害を軽減する。シルバーフィルム等の反射資材を利用するとアブラムシ類の飛来が軽減される。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注 1) たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注 2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は 1 作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

(注 3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

花-6 宿根かすみそう

県内の宿根かすみそう栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズたい肥 2 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を基肥として施用する。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 12 kg/10a 以下 窒素成分量 15 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用フェロモン剤、ハスモンヨトウの大量誘殺用フェロモン剤を設置する。 ○被覆栽培技術 施設開口部を寒冷紗または防虫ネットで被覆すると、アブラムシ類、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをすると、アブラムシ類、アザミウマ類の被害が軽減でき、雑草防除効果もある。 黒マルチは雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒、熱水消毒、蒸気消毒などにより、立枯れ病、萎凋細菌病等の土壌伝染性病害を防除する。 ○光利用技術 粘着資材及び紫外線カットフィルム等を利用して、ハモグリバエ類による被害を軽減する。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

花-7 スターチス

県内のスターチス栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比20以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズたい肥 2 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を基肥として施用する。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 12 kg/10a 以下 窒素成分量 15 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 B T剤による鱗翅目害虫の防除 ○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用フェロモン剤、ハスモンヨトウの大量誘殺用フェロモン剤を設置する。 ○被覆栽培技術 施設開口部を寒冷紗または防虫ネットで被覆すると、アブラムシ類、アザミウマ類、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。紫外線除去フィルムを外張り被覆すると灰色かび病の被害が軽減できる。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをすると、アブラムシ類の被害が軽減でき、雑草防除効果もある。黒マルチは雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒、熱水消毒、蒸気消毒などにより、萎凋細菌病等の土壌伝染性病害を防除する。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

(注4) 紫外線除去フィルム利用は、赤～紫色の花の品種では避ける。

花－8 ガーベラ

県内のガーベラ栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 2 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を基肥として施用する。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 30kg/10a 以下 窒素成分量 35 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用フェロモン剤、ハスモンヨトウの大量誘殺用フェロモン剤を設置する。 ○被覆栽培技術 施設開口部を寒冷紗または防虫ネットで被覆すると、アブラムシ類、アザミウマ類、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。紫外線除去フィルムを外張り被覆すると灰色かび病、アブラムシ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類の被害が軽減できる。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをすると、アブラムシ類、アザミウマ類の被害が軽減でき雑草防除効果もある。黒マルチは雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒、熱水消毒、蒸気消毒などにより、立枯病、疫病、センチュウ類等の土壌伝染性の病害虫を防除する。 ○光利用技術 粘着資材を利用して、コナジラミ類及びアザミウマ類による被害を軽減する。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

花-9 トルコギキョウ

県内のトルコギキョウ栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんたい肥 3 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を基肥として施用する。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 20kg/10a 以下 窒素成分量 25 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 シロイチモジヨトウの交信攪乱用フェロモン剤、ハスモンヨトウの大量誘殺用フェロモン剤を設置する。 ○被覆栽培技術 施設開口部を寒冷紗または防虫ネットで被覆すると、アブラムシ類、アザミウマ類、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。紫外線除去フィルムを外張り被覆すると灰色かび病の被害が軽減できる。 ○マルチ栽培技術 シルバーポリフィルムなど光反射資材でマルチをすると、アブラムシ類、アザミウマ類の被害が軽減でき、雑草防除効果もある。 黒マルチは雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒、熱水消毒、蒸気消毒などにより、萎凋細菌病、立枯病などを防除する。 ○光利用技術 シルバーフィルム等の反射資材を利用するとアブラムシ類の飛来が軽減される。黄色灯の利用によりオオタバコガなどヤガ類の被害を抑制する。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作（1回切り）での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

(注4) 紫外線除去フィルム利用は、赤～紫色の花の品種では、避ける。

花-10 スイトピー

県内のスイトピー栽培ほ場では、塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。高品質安定多収のため、牛ふんオガクズたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、マルチ栽培利用技術による雑草防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切な牛ふんオガクズたい肥（C/N比 20 以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	牛ふんオガクズ たい肥 2 t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を基肥として施用する。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 20 kg/10a 以下 窒素成分量 25 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○マルチ栽培技術 黒マルチ、敷きわらをすると雑草防除効果がある。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱消毒、熱水消毒、蒸気消毒などにより、立枯病、センチュウ類等の土壌伝染性の病害虫を防除する。 ○光利用技術 シルバーフィルム等の反射資材を利用するとアブラムシ類の飛来が軽減される。 	化学農薬使用回数 10%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、県内産牛ふんオガクズたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N 供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥+追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

花-11 せんりょう

せんりょうは、通気性、保水性の良い、酸性土壌を好むため、アルカリ性土壌や排水不良土壌では生育不良や生育障害が認められる。高品質安定多収のため、パークたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めることが大切である。

また、マルチ栽培技術による雑草防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 定植前又は改植時の土壌診断に基づいた適切なパークたい肥（C/N比25以下）の施用を基本とする。	パークたい肥 3 t/10a
化学肥料低減技術	○局所施用及び追肥体系とする。 ○有機質肥料を施用する場合は、塩基やリン酸の蓄積が少ない肥料を選定し、成木の場合においても1回の施用量を窒素成分で7kg/10a以下とする。	窒素成分量 12 kg/10a 以下 窒素成分量 15 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○マルチ栽培技術 黒マルチ、敷きわらをすると雑草防除効果がある。	化学農薬使用回数 10%以上削減
その他の留意事項		

(注1) たい肥の施用量は、パークたい肥の施用を前提とした目安である。他のたい肥を施用する場合及び透水性改善のため下層の改善を行う場合は、たい肥の品質（無機態窒素供給能等）及び土層の深さに基づき施用量を補正する必要がある。

(注2) 窒素施用量は成木園における年間の全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。幼木では樹齢を考慮して施用量を決定する。

(注3) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。

< 果 樹 >

果－１ 温州みかん（露地）

県下の温州みかん園は急傾斜地が多く、その土壌は褐色森林土、黄色土であり、土壌生産力も低い。高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（牛ふんオガクズたい肥、バークたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。 	牛ふんオガクズ たい肥 1 t/10a バークたい肥 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質割合が 50%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分 20kg/10a 以下 (標準園)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術(対象害虫：ゴマダラカミキリ) ○マルチ栽培技術（敷わら、敷草等を含む） (対象病害虫等：雑草、アザミウマ類) ○機械除草技術（対象病害虫等：雑草） ○光利用技術（対象病害虫等：アザミウマ類、アブラムシ類） 	化学農薬散布回数 20 %以上削減
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○シルバーポリマルチによるチャノキイロアザミウマの防除は、全面被覆が望ましいが70%以上でも良い。 ○糸状菌によるゴマダラカミキリ防除は、成虫の初発生前の5月中旬であるが、羽化時期は年により変動するため、処理時期に注意する。 なお、処理は出来るだけ広い面積で行うことが望ましい。 	

(注1) 有機質資材施用量は、上限値の目安である。なお、樹勢中以上の場合、春肥は通常より窒素成分 2kg/10a 差し引いて施用する。

果－2 温州みかん（施設）

県下の温州みかん（施設）は水田転換地等の平坦地で栽培が行われ、その土壌は褐色森林土、黄色土～灰色低地土まで幅があり、土壌生産性にもバラツキがある。樹勢の維持および高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入するなど土づくりを行うことが大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（パークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では、樹間に緑肥植物を導入する。 	パークたい肥： 2 t/10a 又は 牛ふんオガクズたい肥：1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質配合50%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分量 標準園で窒素成分 22 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象病害虫：雑草） ○マルチ（敷わら、敷草を含む）栽培技術 （対象病害虫等：雑草） ○被覆（防虫ネット）栽培技術 （対象病害虫等：ゴマダラカミキリムシ） ○生物農薬利用技術 （対象病害虫等：ゴマダラカミキリムシ） ○光利用技術 （対象病害虫等：アザミウマ類、アブラムシ類） 	化学農薬使用回数 （のべ） 20%以上削減
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○糸状菌によるゴマダラカミキリムシの防除は、成虫の発生は加温時期によるので、観察を怠らず処理時期に注意する。 	

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-3 はっさく

県下のはっさく園は水田転換地が多く、その土壌は灰色低地土であり、土壌生産力が高い。商品化率の高い大果生産と萎縮病対策には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（牛ふんオガクズたい肥、バークたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。 	牛ふんオガクズたい肥 2 t/10a バークたい肥 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質割合が 50%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分 30kg/10a 以下 (標準園)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術(対象害虫：ゴマダラカミキリ) ○マルチ栽培技術（敷わら、敷草等を含む） (対象病虫害等：雑草、アザミウマ類) ○機械除草技術（対象病虫害等：雑草） ○光利用技術（対象病虫害等：アザミウマ類、アブラムシ類） 	化学農薬散布回数 20 %以上削減
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○シルバーポリマルチによるチャノキイロアザミウマの防除は、全面被覆が望ましいが70%以上でも良い。 ○糸状菌によるゴマダラカミキリ防除は、成虫の初発前の5月中旬であるが、羽化時期は年により変動するため、処理時期に注意する。 なお、処理は出来るだけ広面積で行うことが望ましい。 	

(注1) 有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-4 いよかん

県下のいよかん園は緩傾斜地が多く、その土壌は褐色森林土、黄色土であり、土壌生産力も低い。樹勢維持向上並びに大果生産には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（牛ふんオガクズたい肥、バークたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。 	牛ふんオガクズたい肥 2 t/10a バークたい肥 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質割合が 50%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分 28kg/10a 以下 (標準園)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術(対象害虫：ゴマダラカミキリ) ○マルチ栽培技術（敷わら、敷草等を含む） (対象病虫害等：雑草、アザミウマ類) ○機械除草技術（対象病虫害等：雑草） ○光利用技術（対象病虫害等：アザミウマ類、アブラムシ類） 	化学農薬散布回数 20%以上削減
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○シルバーポリマルチによるチャノキイロアザミウマの防除は、全面被覆が望ましいが70%以上でも良い。 ○糸状菌によるゴマダラカミキリ防除は、成虫の初発前の5月中旬であるが、羽化時期は年により変動するため、処理時期に注意する。 なお、処理は出来るだけ広面積で行うことが望ましい。 	

(注1) 有機質資材施用量は上限値の目安である。

果－5 ネーブル

県下のネーブル園は緩傾斜地での栽培が多く、その土壌は褐色森林土、黄色土であり、土壌生産力も低い。樹勢の維持向上並びに高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（パークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 2t/10a 又は パークたい肥： 2t/10a
	○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。	
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術 有機質割合が 50%以上の配合肥料を使用する。	標準園で窒素成分 26kg/10a(年間)
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術（対象病虫害等：ゴマダラカミキリ） ○マルチ（敷わら、敷草等を含む）栽培技術（対象病虫害等：雑草、アザミウマ類） ○機械除草技術（対象病虫害等：雑草） ○光利用技術（対象病虫害等：アザミウマ類）	化学農薬散布回数（のべ） 20%以上削減
その他の留意事項	○シルバーマルチによるチャノキイロアザミウマの防除は、全面被覆が望ましいが、70%以上でも良い。 ○糸状菌によるゴマダラカミキリの防除は、成虫の初発前の5月中旬であるが、羽化時期は年により変動するため、処理時期に注意する。なお、処理の面積は広面積で行うことが望ましい。	

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。

果－6 甘夏

県下の甘夏園は水田転換地での栽培が多く、その土壌は灰色低地土であり、土壌生産力が高い。商品化率の高い大果生産には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（バークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 2t/10a 又は バークたい肥 2t/10a
	○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。	
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術 有機質割合が 50%以上の配合肥料を使用する。	標準園で窒素成分 32kg/10a(年間)
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術（対象病虫害等：ゴマダラカミキリ） ○マルチ（敷わら、敷草等を含む）栽培技術（対象病虫害等：雑草、アザミウマ類） ○機械除草技術（対象病虫害等：雑草） ○光利用技術（対象病虫害等：アザミウマ類、アブラムシ類）	化学農薬散布回数（のべ） 20%以上削減
その他の留意事項	○シルバーマルチによるチャノキイロアザミウマの防除は、全面被覆が望ましいが、70%以上でも良い。 ○糸状菌によるゴマダラカミキリの防除は、成虫の初発前の5月中旬であるが、羽化時期は年により変動するため、処理時期に注意する。なお、処理の面積は広面積で行うことが望ましい。	

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。

果－7 清見

県下の清見園は緩傾斜地が多く、その土壌は褐色森林土、黄色土であり、土壌生産力も低い。完熟清見の収量増には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（牛ふんオガクズたい肥、バークたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。 	牛ふんオガクズたい肥 2 t/10a バークたい肥 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質割合が 50%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分 30kg/10a 以下 (標準園)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術(対象害虫：ゴマダラカミキリ) ○マルチ栽培技術（敷わら、敷草等を含む） (対象病虫害：雑草、アザミウマ類) ○機械除草技術（対象病虫害等：雑草） ○光利用技術（対象病虫害等：アザミウマ類、アブラムシ類） 	化学農薬散布回数 20 %以上削減
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○シルバーポリマルチによるチャノキイロアザミウマの防除は、全面被覆が望ましいが70%以上でも良い。 ○糸状菌によるゴマダラカミキリ防除は、成虫の初発前の5月中旬であるが、羽化時期は年により変動するため、処理時期に注意する。 なお、処理は出来るだけ広面積で行うことが望ましい。 	

(注1) 有機質資材施用量は上限値の目安である。

果－8 不知火、はるみ

県下の不知火、はるみ園は緩傾斜地での栽培が多く、その土壌は褐色森林土、黄色土であり、土壌生産力も低い。樹勢の維持向上並びに高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（パークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 2t/10a 又は パークたい肥 2t/10a
	○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。	
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術 有機質割合が 50%以上の配合肥料を使用する。	標準園で窒素成分 26kg/10a(年間)
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術（対象病虫害等：ゴマダラカミキリ） ○マルチ（敷わら、敷草等を含む）栽培技術（対象病虫害等：雑草、アザミウマ類） ○機械除草技術（対象病虫害等：雑草） ○光利用技術（対象病虫害等：アザミウマ類）	化学農薬散布回数（のべ） 20%以上削減
その他の留意事項	○シルバーマルチによるチャノキイロアザミウマの防除は、全面被覆が望ましいが、70%以上でも良い。 ○糸状菌によるゴマダラカミキリの防除は、成虫の初発前の5月中旬であるが、羽化時期は年により変動するため、処理時期に注意する。なお、処理の面積は広面積で行うことが望ましい。	

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。

果－9 その他中晩柑

(セミノール・バレンシア・ポンカン・せとか・あまか・三宝柑・カラ・ダイダイ)

県下のその他中晩柑類は緩傾斜地～平坦地で栽培され、その土壌は褐色森林土、黄色土～灰色低地土まで幅があり、土壌生産性にもバラツキがある。高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入するなど土づくりを行うことが大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（パークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では、樹間に緑肥植物を導入する。 	パークたい肥： 2 t/10a 牛ふんオガクズたい肥：2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質配合50%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分量 標準園で窒素成分 セミノール 30 kg/10a 以下 バレンシア 30 kg/10a 以下 ポンカン 24 kg/10a 以下 せとか 30 kg/10a 以下 あまか 30 kg/10a 以下 三宝柑 40 kg/10a 以下 カラ 24 kg/10a 以下 ダイダイ 30 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 (対象病害虫等：ゴマダラカミキリムシ) ○マルチ（敷わら、敷草を含む）栽培技術 (対象病害虫等：雑草、アザミウマ類) ○機械除草技術 (対象病害虫：雑草) ○光利用技術 (対象病害虫等：アザミウマ類、アブラムシ類) 	化学農薬使用回数 (のべ) 20%以上削減
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○シルバーマルチによるアザミウマ類の防除は、全面被覆が望ましいが、70%以上でも良い。 ○糸状菌によるゴマダラカミキリムシの防除は、成虫の初発前の5月中旬であるが、羽化時期は年により変動するため、処理時期に注意する。 なお、処理の面積は広面積で行うことが望ましい。	

(注1) 有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-10 レモン（施設）

県下のレモン（施設）は水田転換地等の平坦地で栽培が行われ、その土壌は褐色森林土、黄色土～灰色低地土まで幅があり、土壌生産性にもバラツキがある。樹勢の維持および高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入するなど土づくりを行うことが大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（パークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では、樹間に緑肥植物を導入する。 	パークたい肥： 2 t/10a 又は 牛ふんオガクズたい肥：1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質配合50%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分量 標準園で窒素成分 40 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象病害虫：雑草） ○マルチ（敷わら、敷草を含む）栽培技術 （対象病害虫等：雑草） ○被覆（防虫ネット）栽培技術 （対象病害虫等：ゴマダラカミキリムシ） ○生物農薬利用技術 （対象病害虫等：ゴマダラカミキリムシ） ○光利用技術（対象病害虫等：アザミウマ類、アブラムシ類） 	化学農薬使用回数 （のべ） 20%以上削減
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○糸状菌によるゴマダラカミキリムシの防除は、成虫の発生は加温時期によるので、観察を怠らず処理時期に注意する。 	

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。

果－１１ レモン（露地）

県下のレモン園は緩傾斜地や水田転換地で栽培が行われ、その土壌は褐色森林土、黄色土から灰色低地土まで幅があり、土壌生産力についてもバラツキがある。樹勢の維持向上並びに高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（バークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 2t/10a 又は バークたい肥 2t/10a
	○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。	
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術 有機質割合が 50%以上の配合肥料を使用する。	標準園で窒素成分 28kg/10a(年間)
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術（対象病虫害等：ゴマダラカミキリ） ○マルチ（敷わら、敷草等を含む）栽培技術（対象病虫害等：雑草、アザミウマ類） ○機械除草技術（対象病虫害等：雑草） ○光利用技術（対象病虫害等：アザミウマ類、アブラムシ類）	化学農薬散布回数（のべ） 20%以上削減
その他の留意事項	○シルバーマルチによるチャノキイロアザミウマの防除は、全面被覆が望ましいが、70%以上でも良い。 ○糸状菌によるゴマダラカミキリの防除は、成虫の初発前の5月中旬であるが、羽化時期は年により変動するため、処理時期に注意する。なお、処理の面積は広面積で行うことが望ましい。	

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-12 ゆず

県下のゆず園は緩傾斜地が多く、その土壌は褐色森林土、黄色土であり、土壌生産力も低い。ゆずの収穫期は長く（7月から11月まで）、収量と品質向上には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（バークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。 	牛ふんおがくず たい肥：2t/10a 又は バークたい肥： 2t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質割合が50%以上の配合肥料を使用する。 	標準園で窒素成分 30kg/10a(年間)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術（対象病虫害等：ゴマダラカミキリ） ○マルチ（敷わら、敷草等を含む）栽培技術（対象病虫害等：雑草、アザミウマ類） ○機械除草技術（対象病虫害等：雑草） ○光利用技術（対象病虫害等：アザミウマ類） 	化学農薬散布回数（のべ） 20%以上削減
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○シルバーポリマルチによるチャノキイロアザミウマの防除は、全面被覆が望ましいが70%以上でも良い。 ○糸状菌によるゴマダラカミキリ防除は、成虫の初発前の5月中旬であるが、羽化時期は年により変動するため、処理時期に注意する。 なお、処理は出来るだけ広面積で行うことが望ましい。 	

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-13 キンカン

キンカン園は県南部での栽培が多く、その土壌は褐色森林土、黄色土であり、土壌生産力も低い。樹勢の維持向上並びに高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（パークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズたい肥 2t/10a 又は パークたい肥 2t/10a
	○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。	
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術 有機質割合が 50%以上の配合肥料を使用する。	標準園で窒素成分 14kg/10a(年間)
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術（対象病虫害等：ゴマダラカミキリ） ○マルチ（敷わら、敷草等を含む）栽培技術（対象病虫害等：雑草、アザミウマ類） ○被覆（防鳥ネット）栽培技術（対象病虫害：鳥） ○機械除草技術（対象病虫害等：雑草） ○光利用技術（対象病虫害等：アブラムシ類）	化学農薬散布回数（のべ） 20%以上削減
その他の留意事項	○シルバーマルチによるチャノキイロアザミウマの防除は、全面被覆が望ましいが、70%以上でも良い。 ○糸状菌によるゴマダラカミキリの防除は、成虫の初発前の5月中旬であるが、羽化時期は年により変動するため、処理時期に注意する。なお、処理の面積は広面積で行うことが望ましい。	

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-14 うめ

県下のうめ園は急傾斜地が多く、その土壌は褐色森林土、黄色土であり、土壌生産力も低い。安定生産には、良質の有機物の投入や深耕等の土づくり対策が必要である。また、造成農地においては熟畑化対策が最も大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（牛ふんオガクズたい肥、バークたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木、若木園では樹間に緑肥作物を栽培して刈り取り、樹冠下に敷き、有機物を確保する。 	牛ふんオガクズたい肥 2 t/10a バークたい肥 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質割合が 50%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分 25kg/10a 以下 (標準園)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術（対象害虫：コスカシバ） ○マルチ栽培技術（敷わら、敷草等を含む） (対象病虫害等：雑草) ○機械除草技術（対象病虫害等：雑草） 	化学農薬散布回数 20 % 以上削減
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○コスカシバ防除は初発生前の4月下旬とし、できるだけ広い面積で行う。 ○有機質肥料施用の場合、急傾斜地園では土壌に混和する。 	

(注1) 有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-15 かき

県下のかき園は急傾斜地が多く、その土壌は褐色森林土、赤色土であり、土壌生産力も低い。高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（牛ふんオガクズたい肥、バークたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。 	牛ふんオガクズたい肥 2/10a バークたい肥 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質割合が70%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分 18kg/10a 以下 (標準園)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術（BT剤） (対象病害虫等：カキノヘタムシガ、イラガ類) ○フェロモン剤利用技術(対象害虫：ヒメコスカシバ) ○マルチ栽培技術(シルバーマルチ) (対象病害虫等：ミカンキイロアザミウマ、雑草) ○機械除草技術（対象病害虫等：雑草） ○光利用技術(対象病害虫等：チャバネアオカメムシ、吸ガ類) 	化学農薬散布回数 20%以上削減
その他の留意技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤の設置は成虫初発生前の4月上旬とし、できるだけ広い面積で行う。 	

(注1) 有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-16 もも

県下のもも園は水田転換園等の平坦地に多く、その土壌は灰色低地土であり、耕土が浅く土壌生産力は低い。高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

また、発生予察情報を基本に、生物農薬利用による防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（牛ふんオガクズたい肥、バークたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。 	牛ふんオガクズたい肥 2 t /10a バークたい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質割合が70%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分 14kg/10a以下 (標準園)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 (対象病虫：モモシンクイガ、ナシヒメシンクイ、ハマキムシ類、モモハモグリガ、コスカシバ) ○マルチ栽培技術（敷わら、敷草等を含む） (対象病害虫等：雑草) ○機械除草技術（対象病害虫等：雑草) ○光利用技術（対象病害虫等：シンクイムシ類、チャバネアオカメムシ、吸ガ類) 	化学農薬散布回数 20%以上削減
その他の留意技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤の設置は4月上旬とし、できるだけ広い面積で行う。 	

(注1) 有機質資材施用量は上限値を目安である。

果-17 すもも

県下のすもも園は、緩傾斜地に多く、その土壌は褐色森林土、赤色土、黄色土であり、土壌生産力も低い。高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入する等土作りを行うことが最も大切である。

また、発生予察情報を基本に、マルチ栽培技術による雑草防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（牛ふんオガクズたい肥、バークたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。 	牛ふんオガクズ たい肥 2 t /10a バークたい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質割合が70%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分 19kg/10a 以下 (標準園)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○マルチ栽培技術（敷わら、敷草等を含む） (対象病虫害等：雑草) ○機械除草技術（対象病虫害等：雑草) ○光利用技術（対象病虫害等：鱗翅目害虫) 	化学農薬散布回数 10%以上削減
その他の留意技術		

(注1) 有機質資材施用量は上限値を目安である。

果-18 おうとう

高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入する等土作りを行うことが最も大切である。

また、発生予察情報を基本に、マルチ栽培技術による雑草防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（牛ふんオガクズたい肥、バークたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。 	牛ふんオガクズ たい肥 2 t /10a バークたい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質割合が70%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分 20kg/10a 以下 (標準園)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○マルチ栽培技術（敷わら、敷草等を含む） (対象病虫害等：雑草) ○機械除草技術（対象病虫害等：雑草) ○フェロモン剤利用技術（対象害虫：コスカシバ、ハマキムシ類等） ○生物農薬利用技術（対象害虫：ハマキムシ類等） 	化学農薬散布回数 10%以上削減
その他の留意技術		

(注1) 有機質資材施用量は上限値を目安である。

果-19 ぶどう

県下のぶどう園は緩傾斜地が多く、その土壌は褐色森林土、赤色土であり、土壌生産力も低い。高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入する等土作りを行うことが最も大切である。

また、発生予察情報を基本に、マルチ栽培技術による雑草防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（牛ふんオガクズたい肥、バークたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。 	牛ふんオガクズ たい肥 2 t /10a バークたい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質割合が70%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分 9 kg/10a 以下 (標準園)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○マルチ栽培技術（敷きわら、敷草等を含む） (対象病害虫等：雑草) ○機械除草技術（対象病害虫等：雑草) ○光利用技術（対象病害虫等：鱗翅目害虫) 	化学農薬散布回数 10%以上削減
その他の留意技術		

(注1) 有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-20 ブルーベリー（露地）

県下のブルーベリーは水田転換地等の平坦地を中心に栽培が拡大している。ブルーベリーは酸性土壌を好み、有機質が多く透水性、保水性及び通気性を兼ね備えた土壌で生育が優れる。また、浅根域であるため、夏期の土壌表面の乾燥防止対策として、抑草を兼ねたワラ、モミガラ等の有機物によるマルチングに利点がある。

安定生産には、ピートモス等の有機物の投入により土づくりを行うことが大切である。ただし、有機物によっては土壌pHを上昇させ、生育障害を招くので、定期的にpH測定することが望ましい。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（ピートモス等）の施用を基本とする。	ピートモス 5000ℓ/10a
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術 有機質肥料を使用する。 ○局所施用技術 根域への表層施用を基本とする。 ○肥効調整型肥料施用技術 肥効調整型肥料を活用する。	窒素成分量 7 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○機械除草技術（対象病害虫：雑草） ○マルチ（敷わら、敷草を含む）栽培技術 （対象病害虫等：雑草） ○生物農薬利用技術 BT剤の利用 （対象病害虫等：ケムシ類） 天敵の利用 （対象病害虫等：ヒメコガネ幼虫）	化学農薬使用回数 （のべ） 20%以上削減
その他の留意事項	○施肥量は樹齢、樹体に応じて加減する。	

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-21 なし

県下のなし（幸水、豊水）園は緩傾斜地が多く、その土壌は褐色森林土、赤色土であり、土壌生産力も低い。高品質果実の安定・大果生産には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（パークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。 	牛ふんおがくず たい肥：2t/10a 又は パークたい肥： 2t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質割合が70%以上の配合肥料を使用する。 	標準園で窒素成分 18kg/10a(年間)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術（対象病害虫等：ハマキムシ類、シンクイムシ類） ○被覆栽培技術（防虫網） （対象病害虫等：果樹カメムシ類、吸蛾類等） ○マルチ栽培技術（シルバーマルチ） （対象病害虫等：アブラムシ類、雑草） ○機械除草技術（対象病害虫等：雑草） ○光利用技術（対象病害虫等：シンクイムシ類、チャバネアオカメムシ、吸ガ類） 	化学農薬散布回数（のべ） 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-22 キウイフルーツ

県下のキウイフルーツ園は水田転換地が多く、その土壌は灰色低地土であり、土壌生産力が高い。商品化率の高い大果生産には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（バークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。 	鶏ふんたい肥： 0.5t/10a 又は 牛ふんおがくず たい肥： 1t/10a 又は バークたい肥： 2t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質割合が50%以上の配合肥料を使用する。 	標準園で窒素成分 25kg/10a (年間)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象病虫害等：雑草） 	化学農薬散布回数（のべ） 10% 以上削減
その他の留意事項		

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-23 びわ（施設）

県下のびわ園（施設）は紀中地域での栽培が多く、その土壌は褐色森林土、黄色土～灰色低地土まで幅があり、土壌生産性にもバラツキがある。高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入するなど土づくりを行うことが大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（パークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では、樹間に緑肥植物を導入する。 	パークたい肥： 1 t/10a 又は 牛ふんオガクズたい肥：1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 有機質配合50%以上の配合肥料を使用する。 	窒素成分量 標準園で窒素成分 20 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象病虫害：雑草） ○マルチ（敷わら、敷草を含む）栽培技術 （対象病虫害等：雑草） 	化学農薬使用回数 （のべ） 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-24 びわ（露地）

県下のびわ園は特に急傾斜地での栽培が多く、その土壌は褐色森林土、黄色土であり、土壌生産力も低い。高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入する等土づくりを行うことが最も大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（パークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 幼木～若木園では樹間に緑肥作物を導入する。	牛ふんオガクズ たい肥：2t/10a 又は パークたい肥： 2t/10a
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術 有機質割合が50%以上の配合肥料を使用する。	標準園で窒素成分 20kg/10a（年間）
化学農薬低減技術	○機械除草技術（対象病虫害等：雑草）	化学農薬散布回数（のべ） 30%以上削減
その他の留意事項		

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。なお、樹勢中以上の園地に有機質資材を上限値施用した場合、N成分で通常の2kg/10a差し引いて施肥する。

果-25 いちじく

県下のいちじく園は水田転換園が多く、その土壌は灰色低地土であり生産力が高い。高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入する等土作りを行うことが大切である。

また、発生予察情報を基本に、マルチ栽培技術による雑草防除の徹底等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（牛ふんオガクズたい肥、バークたい肥）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズ たい肥 2 t /10a バークたい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術 有機質割合が70%以上の配合肥料を使用する。	窒素成分 9.0kg/10a以下 (標準園)
化学農薬低減技術	○マルチ栽培技術(シルバーポリマルチ、敷きわら、敷草等を含む)(対象病虫害等:アザミウマ類、雑草) ○機械除草技術(対象病虫害等:雑草) ○光利用技術(対象病虫害等:アザミウマ類)	化学農薬散布回数 10%以上削減
その他の留意技術	○シルバーポリマルチ(アザミウマ類対象)の被覆時期は5月下旬～9月上旬とする。	

(注1) 有機質資材施用量は上限値の目安である。

果-26 マンゴー（施設）

県下のマンゴーは水田転換地等の平坦地で栽培が行われ、その土壌は褐色森林土、黄色土～灰色低地土まで幅があり、土壌生産性にもバラツキがある。樹勢の維持および高品質果実の安定生産には、良質の有機物を投入するなど土づくりを行うことが大切である。

併せ、有害動植物の防除に使用される農薬の使用量、回数を減らすために効果のある技術として、下記の内容がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（パークたい肥、牛ふんオガクズたい肥）の施用を基本とする。	パークたい肥： 2 t/10a 又は 牛ふんオガクズたい肥：1 t/10a
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術 有機質配合50%以上の配合肥料を使用する。	窒素成分量 標準園で窒素成分 18 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○機械除草技術（対象病虫害：雑草） ○マルチ（敷わら、敷草を含む）栽培技術（対象病虫害等：雑草、アザミウマ類） ○被覆（防虫ネット）栽培技術（対象病虫害等：カメムシ類） ○生物農薬利用技術（BT剤）（対象病虫害等：ケムシ類） ○光利用技術（シルバーマルチ等）（対象病虫害類：アザミウマ類）	化学農薬使用回数（のべ） 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）有機質資材施用量は上限値の目安である。

<工芸作物>

工-1 茶

県内の茶栽培ほ場の多くは、褐色森林土、黄色土であり、土壤生産力が低い。高品質安定多収のため、バークたい肥等の良質有機物の投入により地力を高めるとともに透水性改善による硝酸態窒素の表面流去を抑制し、窒素の肥効を高めることが大切である。

また、病虫害防除は性フェロモン剤や BT 剤等の利用により農薬散布の回数削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壤診断に基づいた適切なバークたい肥（C/N 比 25 以下）の施用を基本とする。	バークたい肥 2 t/10a
化学肥料低減技術	○夏肥、秋肥施用では、土壤診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。	窒素成分量 50 kg/10a 以下
	○有機質肥料を使用する場合は局所施用とする。	窒素成分量 60 kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 BT 剤によるチャハマキ、チャノコカクモンハマキ、チャノホソガ、ヨモギエダシヤクの防除を行う。 ○性フェロモン剤利用技術 チャハマキ、チャノコカクモンハマキの交信攪乱用性フェロモン剤を処理する。 ○マルチ栽培技術 敷き草・ワラを行い雑草防除を行う。	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

(注 1) たい肥の施用量はバークたい肥の施用を前提とした目安である。これ以外の品質（N 供給能、石灰含量等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

(注 2) 透水性改善のために、たい肥を畝間に施用後、深耕することが望ましい。

(注 3) 肥効調節型肥料を施用する場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は、年間の全施用量の上限の目安である。

(注 4) ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壤で覆うことが望ましい。

第2 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項

1 土壌診断の励行

たい肥等の有機質資材の適切な施用を行うためには、土壌有機物含有量等を分析項目に含めた土壌診断が必要である。さらに、自家製のたい肥等を使用する場合には、たい肥の品質を分析により明らかにする必要がある。

このため、各振興局農業振興課においては、農業者から依頼がある場合に備え、農林水産総合技術センターの各試験場との連携を図りつつ、速やかに土壌診断を実施し、結果を知らせる体制を整備することとしている。

また、各農業協同組合の営農センター等の土壌診断施設においても、各振興局農業振興課との連携のもと、土壌診断を行う体制を整備することとしている。

このため、持続性の高い農業生産方式の導入に当たっては、このような土壌診断体制の積極的な活用を図るとともに、施肥量の決定等に関し、普及指導員、営農指導員等から診断結果を踏まえたアドバイスを受け、土壌の性質の改善と合理化に努めることとする。

2 きめ細かな施肥の実施

肥効調節型肥料には肥効発現の速度が異なる資材が多く市販されているうえ、同一肥料であっても、栽培環境（温度、水分）により肥効が異なるため、栽培する品種及び作型に適した肥料を選定する必要がある。

和歌山県農林水産部では、農林水産総合技術センターの各試験場において行った試験結果等に基づき、各地域の土壌の性質等に適合した局所施肥の方法及び肥効調節型肥料の選択に関する情報を提供しているので、持続性の高い農業生産方式を導入しようとする農業者は、最寄りの振興局農業振興課、農業協同組合等を通じてこれらの情報を十分活用することが必要である。

3 発生予察に基づく的確な防除の実施

持続性の高い農業生産方式の円滑な実施のためには、農作物病虫害防除所からの精度の高い予察情報の提供が重要である。このため、持続性の高い農業生産方式に取り組む農業者が要防除水準を適切に設定できるよう、予察情報の精度を向上させるとともに、これらの情報が農業者に的確に伝達されるような体制を強化することとしている。

このため、生産方式の導入に当たっては、このような発生予察情報を有効に活用するとともに、それに基づく生物農薬等による防除の効果的な実施に関し、普及指導員、農作物病虫害防除所職員等による巡回指導を活用する等適宜アドバイスを受けることが重要である。

第3 その他必要な事項

1 土壌の性質の総合的な改善

たい肥等有機質資材の施用は、土壌の性質の総合的な改善を行う有効な手法とされているが、土壌の抜本的改善のためには、たい肥の施用だけでは不十分な場合もあり、これが適切に行われない場合は、持続性の高い農業生産方式の効率的な実施が困難になることも想定される。

このため有効土層を拡大し、有効保水量を増すとともに、地力を高め作物の生理作用を旺盛かつ円滑にするため、深耕、客土、排水対策等を合わせて行うこととする。

なお、県内の各地力増進地域において地力増進対策指針が定められている場合にあっては、持続性の高い農業生産方式に取り組む農業者は同対策指針の内容に即した改善方策を行うことが必要である。

2 必要な機械、機材等及び資金の調達

持続性の高い農業生産方式の導入には、新たな営農用機械や資材等を整備する必要があることがある。これらの機械・資材は、慣行の生産方式の実施に用いるものと比較して、高価であるだけでなく、その利用に関しても高度な技術が要求されるものであることから、個々の農業者の経営内容や技術水準を見極めつつ、導入を行うことが肝要である。

また、これらの農業機械、資材等を整備する場合には、取り組みの初期段階における経営的な負担の軽減を図る観点から、必要に応じ、農業改良資金その他の融資制度を積極的に活用することが適当である。

3 関係補助事業の積極的な活用

持続性の高い農業生産方式に地域全体で取り組む場合には、普及指導員による濃密指導や実証ほの設置等による技術の確立、たい肥舎等共同利用施設の建設による生産条件の整備を推進することが肝要となることから、これらを総合的に実施するため、必要に応じ、関係補助事業を積極的に活用することが適当である。

第4 持続性の高い農業生産方式の定義について

土壌の性質に由来する農地の生産力の維持増進、その他良好な営農環境の確保に資すると認められる合理的な農業の生産方式であって、法律で定められた(1)たい肥等施用による土づくり技術、(2)化学肥料低減技術、(3)化学農薬低減技術の3つの技術のうち、省令で定めた具体的技術の中から最低1つ以上ずつ選択し、3つの技術すべてを導入した生産方式とする。

○持続性の高い農業生産方式を構成する技術（省令指定技術）の内容

(1) たい肥等施用による土づくり技術

①たい肥等有機質資材施用技術	土壌診断を行い、良質なたい肥などを施用する。
②緑肥作物利用技術	土壌診断を行い、レンゲなどの緑肥作物を栽培して農地にすき込む。

(2) 化学肥料低減技術

①局所施肥技術	作物が利用しやすい場所に集中的に肥料を施用する。
②肥効調節型肥料施用技術	肥料成分の溶け出す速度を調節した化学肥料を施用する。
③有機質肥料施用技術	有機質肥料を化学肥料に代替して使用する。

(3) 化学農薬低減技術

①温湯種子消毒技術	種子を温湯に浸すことにより、有害動植物を駆除する。
②機械除草技術	機械的方法により雑草を駆除する。
③除草用動物利用技術	アイガモ、コイなどによって雑草を駆除する。
④生物農薬利用技術	農薬取締法上の天敵で登録を受けたものを利用する。
⑤対抗植物利用技術	土壌中の有害動植物を駆除またはまん延を防止する植物を栽培する。
⑥抵抗性品種栽培・台木利用技術	抵抗性品種の栽培や抵抗性台木を利用する。
⑦土壌還元消毒技術	土壌中の酸素の濃度を低下させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する。
⑧熱利用土壌消毒技術	土壌に熱を加えて温度を上昇させ、土壌中の有害動植物を駆除する。
⑨光利用技術	シルバーフィルムや粘着資材、黄色灯等により、害虫を誘引、忌避させる。
⑩被覆栽培技術	有害動植物の付着を防止するための資材で農作物を被覆する。
⑪フェロモン剤利用技術	昆虫のフェロモン作用を有する薬剤を利用して、トラップで捕殺したり交信をかく乱したりする。
⑫マルチ栽培技術	土壌の表面を有害動植物のまん延を防止するための資材で覆う。